

金毘羅參詣名所圖會二

和書門			
八	六	七	一
冊	架	函	號
六	九	五	類

内閣文庫			
五	八	三	和
冊	六	七	書
三	九	一	類
架	冊	號	

内閣文庫	
番號	和 8671
冊數	6 (2)
函號	176 36



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM Kodak



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

金毘羅泰詣名所圖會卷之三

目錄

金毘羅船渡海の圖 圓電鎮城門口

通女盤挂對話の圖 中府口二軒家

田村の池 拵魚の神社

神野の神社 武智方次郎の墓

富熊の神社 櫛梨の神社

横瀬領分の境 櫻の馬場

松櫻の大樹 榎井新町

石淵 萬農の池

打越坂 内町旅駕屋

大亀海上お浮む話 井上通女の傳

金毘羅伊豫の分道 山北八幡宮

西行之本松 郡家八幡宮

与北の茶堂 公文の茶堂

大歳の神社 石井の神社

紫銅鳥居 靈驗石

一之鳥居 鞘橋

萬農地の神社 十市の池

一之坂 名産館店

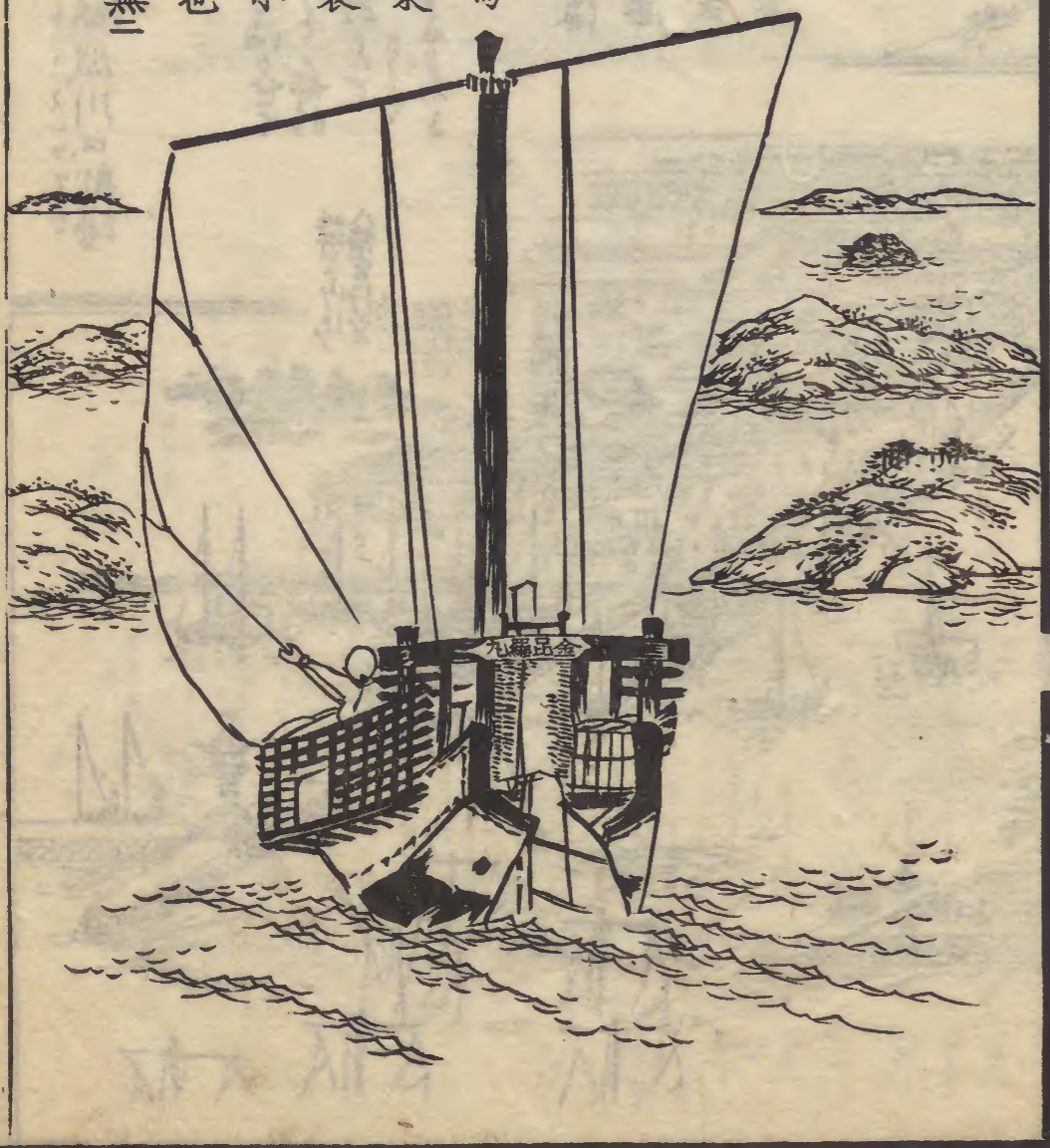
明治十年購求

愛宕町	天神社	愛宕山	箸洗の池
清少納言之墳	同石碑	清女夢中ノ意趣と告る圖	
普門院	二王門	櫻の馬場	真光院
萬福院	尊勝院	神護院	竹園
別業幽軒	本坊金光院	神馬堂	茶堂
愛宕山遙拜所	多寶塔	萬燈堂	大野口
古帳菴の碑	二天門 鐘樓	本地堂	行者堂
大行司堂	紫銅鳥居	御本社	拜殿
二十番神社	社頭より眺望の圖	經藏	紫銅之碑
觀音堂	後堂金剛坊	繪馬堂	阿弥陀堂
孔雀明王堂	籠所	觀音坂	蓮池

金二ノ目ノ

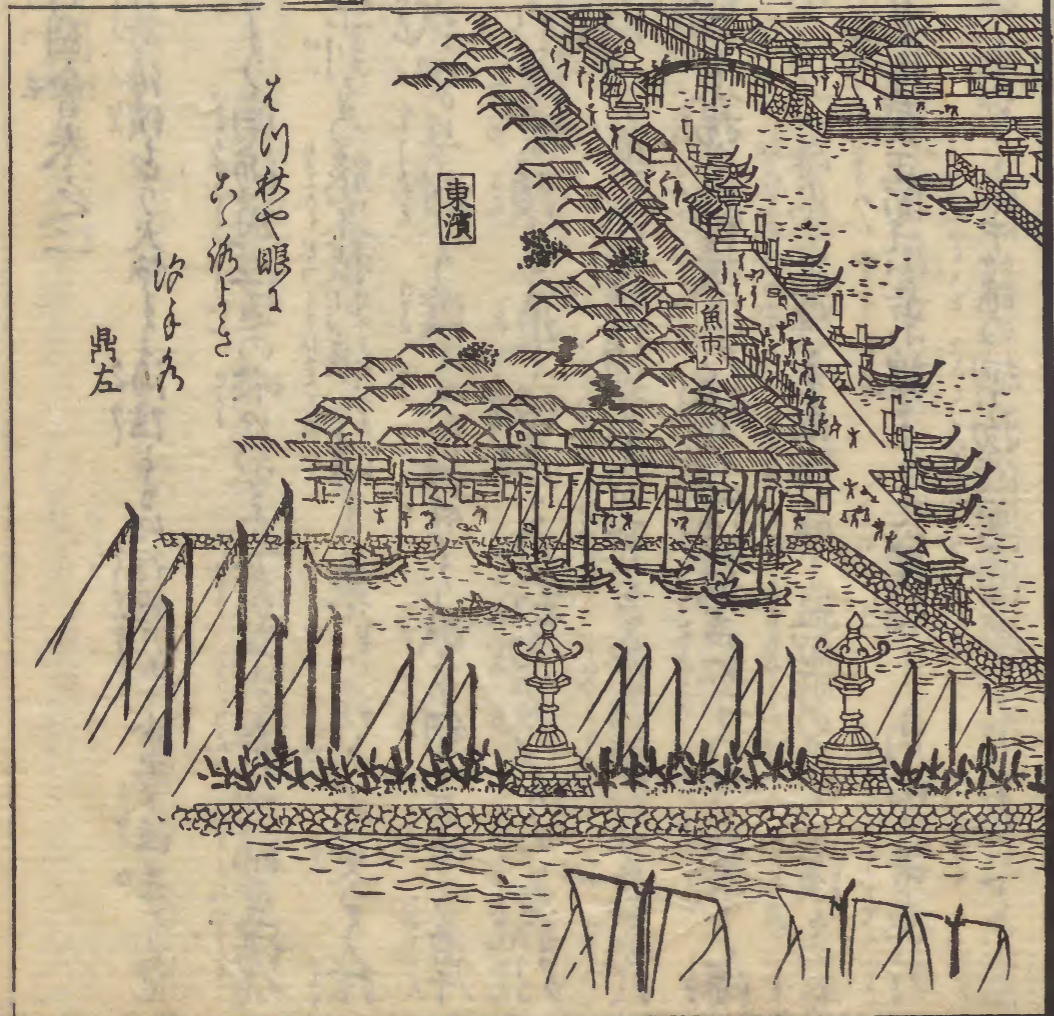
金堂	例祭神支行列の圖	興泉寺	諸道行程
大麻の神社	古作両傘の圖	五岳山善通寺	金堂
五重大塔	鐘樓 鼓樓	常行堂	觀喜天祠
五社明神社	天神社	經藏	善女龍王社
南大門	法然上人の塔	足利尊氏郷の塔	楠大樹
觀智院觀音堂	花成坊	院王坊藥師堂	奥院御影堂
親鸞堂	十王堂	茶堂 鐘樓	二王門
護摩堂	御成門	本坊	邀月亭
道範阿蘭梨の活	佐伯八幡宮	使鬼神額と忍る圖	獨鉦水
御手洗の水	香色山	四方護荒神祠	六地蔵
火上山	中山	御影の池	我拜師山

萬葉集
百傳八十之嶋
廻平榜舩爾衆
西情忘不得裳
嶋傳足速乃小
舟風守年者也
經南相常齒無三



金二ノ目三

日本府志圖



その林や眼
 の海と
 治子
 鼎左

東濱

讃州圓亀鎮城川口船場

宗政山八宗

船風のふくまほろそ

も船は

あう乃とねと

こて

よとあ

蕃教

此所山北
 八幡宮行官

福

西濱

無教輕帆筆海
 天春風影映港
 門烟随潮歸去
 随潮到多直象
 山香客船

金陵



金二ノ一

金毘羅参詣名所圖會卷之二

圓亀湊

讃岐国北の海濱あり大坂より海陸とも行程凡五十余里下津井凡五里
 當津、幾内條より南海道往返の喉のあたりに象頭山の参詣大師靈場此
 遍路其餘南海小到る乃旅客棧洲浪津より乗船の途言も更なる陸
 路と下向の軍も或田の早村より渡り又下津井より砥石河を舟より岸
 せりと言事はされ東雲の頃より追々浪花より此船向ひ路の舟引
 もきびの黄昏時より高路の渡海登船の出帆有て船真賑ひ昼夜と分
 濱辺の藏の儀物の求揚産物積送の途出仲は掛声船子の呼声留り湊
 には縦横の石の波をわけて紫銅の大燈籠夜陸と照し監船所の嚴重濱々の石
 燈籠魚市の群集御城の正面は山岳魏々として敬馬悟り内町は市野軒
 とあり交易のやまはく就中籠の細物濃團圓座ふんち物とを鬻

金二ノ二

家多々旅客のやまはく需めて家土産とするも街の蟹菜実小當國第一乃湊
 と言ふべし 城下の封後寺院神社の類は後編にあり著るべきに似たり

因田耕筆、守興和尚が結云

備前の下津あり船中丸亀の海に舟通くうてさるるむらひ又人牛
 あるまは標もも深るるまはつら長た水とららるるて船もあつら
 じやし怪しく船中丸亀の舟通くうてさるるむらひ又人牛の舟と出
 空曇るる海長閑なる日かか首と出づらひ今もあつらるる舟と出
 舟と出づらひ今もあつらるる舟と出づらひ今もあつらるる舟と出
 舟と出づらひ今もあつらるる舟と出づらひ今もあつらるる舟と出

井上通女

丸亀の藩中井上何某の良女九録中の人なり

傳云通女、海邊國圓亀宮極彦の家臣井上儀左衛門某の女なり生質
 幼雅も慧敏も書讀も待賦も兼て和歌も通ト雅才を以て世小岡の良
 士女子の才藻あつて而して真正通女なり若者等に觀る所あり十歳に時



五雲散人
通女の紀り
後にも詞

唐山之孺子

善唐詩皇味

之州女善和歌蓋

國風之行使然而

不足為奇者也近

世處女巧歌兼得

待法者其惟通子

欽



井上通女

通女系極侯の藩士井上何某の

處女として幼少て書き詩

欽もて成人書きる女子なり

十二歳の時石上依て武家統

く世道の紀と東海紀行名

づ初天和二年とられ寛

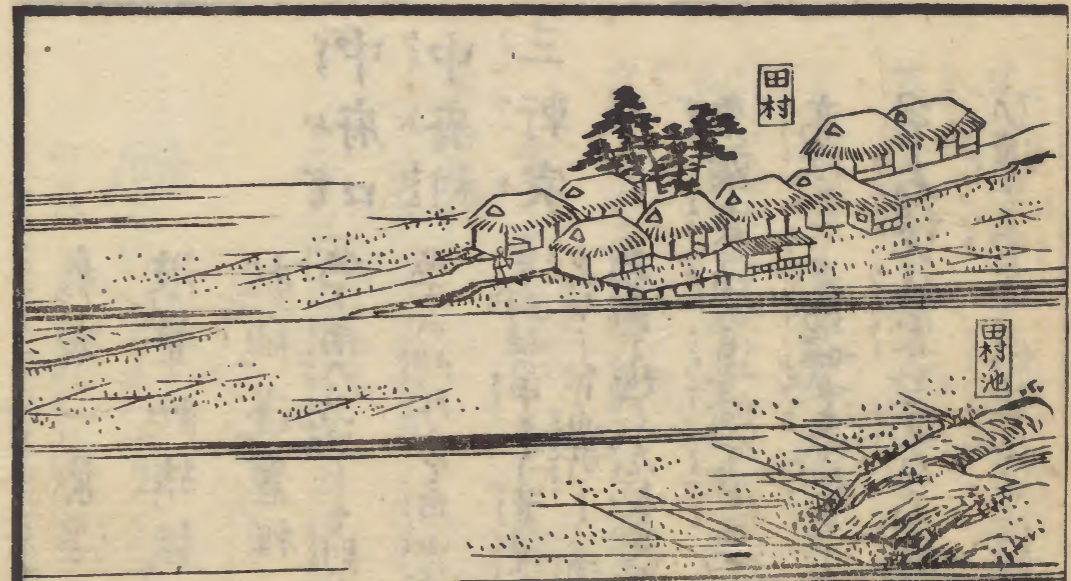
文二年の頃乃生れらるる鑑

掛禪師と佛佛と福哉ふ

れ欽と謙とらるるを言

系の考でるるをんた

金二ノ三



花屋井
 ちんて
 むらさき
 門の畑
 や
 長中
 あく
 然ま
 天さ
 金の南
 わ
 月
 むら
 金
 げ
 杉
 杉
 杉



金二ノ五

山北八幡宮

街道の左の方山の北村にあり始に城山の北に有る故斯号せり然る後世今の地を遷居今の地は城山の南にあり然るも向名と用ひて山の北と称す地名とも山の北村とあり九志市中の生土神として例年八月十五日福嶋の御旅所へ神輿渡御ありて最賑く

田村池

田村郷中往還の右あり

柞原神社

往還の左柞原村より村中の生土神より高幢大明神と称す

祭神一座 神功皇后

里俗傳て此神安産と守らせりて穢村の婦人膝胎をわがさるるに額をかくる小靈験新とあり

例祭 九月十八日

故に安産の神と称す

西行三本松

本社の後より今捨て其幹の跡あり故事ありて詳

郡家八幡宮

郡家村より村中の生土神より往還の右の方の社ありて例年九月十二日国守象頭山南系詣の時當神主の館に憩せりて結梅最も

神野神社

同村より八幡の正向より往還の右にあり土人皇子の社とあり

祭神一座 天穗日命

延喜式出那珂郡二座の内なり
例祭 九月十五日

金二ノ六

武智方次郎云者墓

郡家村入口道の傍にあり

天保三壬辰年九月二十八日

夫曰或國の武士復讐のありて諸公と遍歴しおと宿意を果さるるに終に此墓痛死に故郷詳るるに代りて國守のりれを給ひて標と建てをせり

与北村

村中の中間に茶堂ありて村より永代常撰待たり金毘羅系詣の旅客を小憩ふ路の右にあり

公文村

村中に茶堂ありて撰待に街道の左にあり
松が端 公文村の右にあり

富熊神社

公文村の端の山より此所の生土神より祭神一座 吉備武彦命 土人富熊明神とあり

榊梨神社

西榊梨村にあり延喜式出那珂郡二座の内より祭神一座 神櫛玉 景行紀に云神櫛皇子は是榊梨園造之始祖なり

大歳神社

東榊梨村より此所の生土神より祭神一座 飯津女命 往還の右方に

石井神社

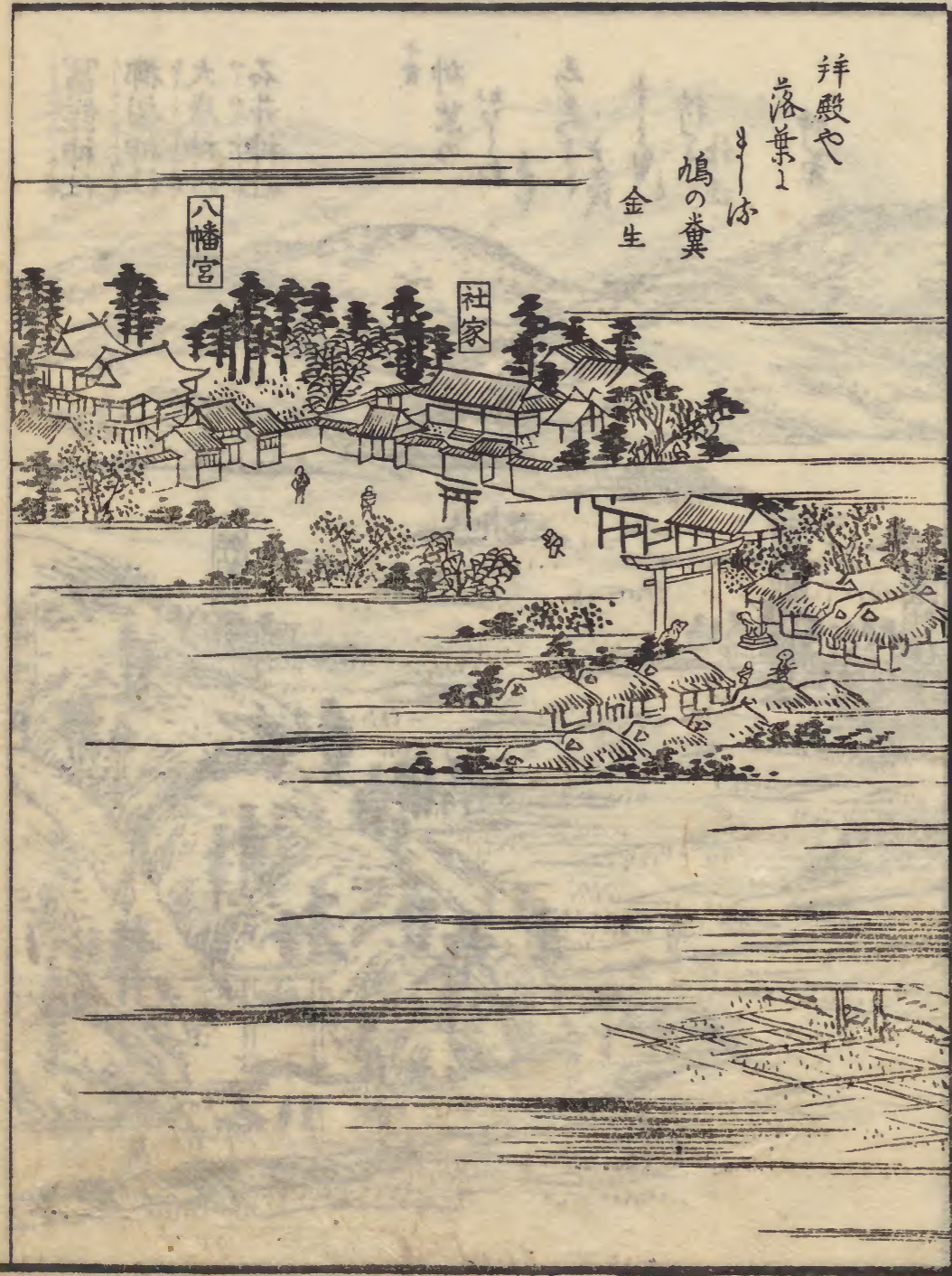
苗田村にあり此所の生土神より祭神一座 應神天皇 往還の右方に

横瀬村

村中に領分界の標石あり此所より金毘羅領なり

櫻馬場

左右櫻の並木ありて晩春の頃ハ爛熳して風景なり



拜殿や

落葉

とて

鳩の糞

金生

八幡宮

社家



神野神社
郡家八幡宮

草庵集

柳葉

鏡と

むらさき

うら

くさ代

うら

さか

松阿

郡家村

神野神社

金二ノ七

紫銅鳥居

東武の信者より奉納する所なり至つて度太くして具事なり

靈驗石

鳥居の内右の傍より石面を十字の銘文あり拾遺の邦に未だ

松櫻の大樹

鳥居の内右の傍より象頭山八景の内にて二本樹の春風よく影せり此所

榎井村

おのり程百五十丁の標あり

一の鳥居

石にて成る西よりむらひてへをり御本社より十八丁

鞘橋

東西おかる長凡十二間なり幅凡二間余屋上瓦葺なり

十二景之内

橋上は鮮魚青物類の店其余食用の品も道具古手物あどの店ありてむら

象頭山八景

二本樹春風 好景

人攀西嶽去

水向北溟流 風力權無運 始知不是舟

石瀾

鞘橋の川上より仰々九月八日川の御神夏此所より行り

金二ノ九



象頭山八景
二本樹春風 好景
ふさやをたの下の風乃
長軍さうり
いそこの人
と海をまよふれ
官道霜横輕燕飛
兩株旗樹弄春暉
暗花影暖微風度
業徹往還香客衣
雲航

十二景之内 石淵新浴

林春常

石淵風浴新 知有詠歸人 能使箇心潔 臨流欲賽神

萬農の池 石淵の川上より弘仁帝御宇築く所ありて下流に十二景の内

十二景之内 萬農曲流

清波浮喬岑 長流早則霖 弘仁餘帝澤 一軟當千金

今昔物語

今昔物語 今ハむろ 後岐国那珂郡ハ萬農池トて大ナル池ナリ 高野大師堂 海其国此人ト
何レトテ人ト云ルガ 築ル池アリ 池ノ中ニ見入ル 摩訶庵ニカケル 其ノ人ノ
高クニ見ル池トハカクハ海カドノ中ニ見入ル 摩訶庵ニカケル 其ノ人ノ
カケル見ル池トハカクハ海カドノ中ニ見入ル 摩訶庵ニカケル 其ノ人ノ
国ノ人田トシテ早魃ノ時トクモ此池トて水ヲ下ルニシテ 國ノ人トシテ
合リテ 池トシテ早魃ノ時トクモ此池トて水ヲ下ルニシテ 國ノ人トシテ
大小ノ魚トシテ早魃ノ時トクモ此池トて水ヲ下ルニシテ 國ノ人トシテ
キレク魚満トシテ早魃ノ時トクモ此池トて水ヲ下ルニシテ 國ノ人トシテ

金二ノ十

滿農の池

象頭山八景 宿瑜

滿農池遊鶴

千代トシテ

カケル見ル池トハカクハ海カドノ中ニ見入ル 摩訶庵ニカケル 其ノ人ノ
国ノ人田トシテ早魃ノ時トクモ此池トて水ヲ下ルニシテ 國ノ人トシテ
合リテ 池トシテ早魃ノ時トクモ此池トて水ヲ下ルニシテ 國ノ人トシテ
大小ノ魚トシテ早魃ノ時トクモ此池トて水ヲ下ルニシテ 國ノ人トシテ
キレク魚満トシテ早魃ノ時トクモ此池トて水ヲ下ルニシテ 國ノ人トシテ

百里鏡光池水用
十峰黛色入波摧
鶴群忽自雲間下
恰似傳書渡海来



打越坂 金毘羅より凡里
許寅の方より

象頭山八景

打越坂夕陽

資深

旅人の

あけ坂は 夕日かけ

つらやうと ころねん

暢舟

踰阪豁然西望開
参差樓閣倚崔嵬
夕陽一抹翠微項
隱々鐘聲度水來



金二ノ十二

者ども鎮よりつりて物倍ちどりるはのぞあられ海農池よかどりうら
と魚うまに人の裡おもゆらんとほろり守つて開きやい
して此池の魚をとるをよし思ふ池をうらなれば人にて網を置ても
何ら所給池の堤は大なる宜とてふして夫より水とりして水のあ
野魚のへびと物とめきて取んとて斯くいふれば水も出るは
がして其穴より身くの魚もを敷むりもく取てりかして後穴を
あせりて水出るもあいつりて塞とぬ穴次第よりくわ
うらふと雨やうて池乃より流まらる河に水まらりて池も海に其
うらうて堤つらうて池の水國中に田島人あそんでねあうの魚ハ
流と出るあうこそ人取れりかりて後池の水あわうらあ
とらぬに標するて池の河にからもあうらうと思ふあふけんを
池とらぬいふとあやんあふれ権者の人とりれと築れ給る池と夫
いふとあうらうに標するて池のあうらうてあうの人の家と
田島とらぬいふ標するてあうらうてあやんてあやんてあやん
とらぬいふ標するてあうらうてあやんてあやんてあやん

そやらの其池のわらわらみみふらふらとあんなうはくはくもやき
 斯有ハ後世修補して復今の如く成しものうら

満農池神社 池の傍より二代守備曰元慶五年十月十四日戊午授後任國萬
 十市池 又取吉市池 十市里 十市山 萬農の池の下流にあり

名寄

今いそと成ちの池乃みりりなごはもあ人恋つ 為ま

内町 靴の西傍より坂の間の同いなる後修補して河も家建多承あり坂の
 傍に庚申堂あり衣の向より櫃の上より所地産堂ありいも至つてお局あり

十二景之内 五百長市

半千長市生 高下巧成隣 無意弄烟景 沽諸待價人

一之坂 大坂より此坂の間に名物の銘賣店多し諸人家土産に需むるごとく愛宕
 山の標大峯の陀羅尼が異あり

愛宕町 大坂のわらわらみみふらふらとあんなうはくはくもやき
 斯有ハ後世修補して復今の如く成しものうら

金二ノ十二

靴橋

此地の惣名を松尾といふ
 坂と寺と松尾寺といひ又
 此所よりなる人多く松尾
 成り又松尾と松尾を
 いふ者多し此も昔
 より御神号と祈のゆゑに
 けしと一系に令毘羅と
 いひあはせり

賣物の福よりよ
 さやハ橋はくは
 つけくまありろ
 んせ乃福い
 後ろ丸



天神社 愛宕の中央天満木自在天神相殿愛宕権現 荒神ふと祭る
 正音あり
 愛宕町より向ふ愛宕山の上の愛宕山大権現の社あり 金毘羅の守護神
 十景之内 著洗清連
 愛宕の山中に日藏ありて是は一ツの小池ありて此水は清く早魘は早く
 是十月御神まつり候に著しおしぐ御山に捨り守護神捨いあつ
 め此池にて洗ひ阿州著洗清連の山谷小池のびりあつていつてついで著
 りし池の池と云ふ

十二景之内 著洗清連

林春幸

一飽有餘清 波漣源口亭 漱流頻下著 喚起子荊情
 清少納言之墳 一の坂の上鼓樓の傍ありて近年墳の辺に碑を建り

傳云 往昔室永の年間鼓樓造らるる此墳を他に移しかんとて
 此邊の人の言ふ清女の霊ありて告りて歌
 うつた跡のふりてなれはふやうとまらぬと有てまらぬ
 こと、實に清女の墓ありて木の傍にありてなれりて

金二ノ十三



清少納言古墳 拾遺抄に記せしむる古墳
 象頭山八景 清氏旅杖雨 佐陀幾處
 中れあけし小庵の
 古はくはふりかゝる
 妹乃むらさき
 侍雪中宮彼一時
 空留孤塚象山陸
 昔日無人買馬骨
 于今秋雨為君悲
 梅隱

清少納言二條院の皇后は下官女あり舎人親王の曾孫通雄は
 清少納言の姓を賜ふ通雄五世の孫清原元輔の女故に清字を以て凡そ納
 言の官名なり長徳長保年間著述せし書籍と枕草紙とも紫氏
 源氏物語と相並びて世に流行る老後に零落して凡そ又元輔が
 住一家の跡に住るる後四國一方向ももるるぞ

春曙抄云

去上法印百人一首抄云清少納言老後に四國の方に落おれりおと
 愚素とて一條院の御代の初め道隆公關白の御定子皇后の宮に立
 めりて御威光もめでさうに清少納言もかの皇后の宮にありて
 こゝまで上臈の次とてやたらに女方の心とかりり内侍もあつて
 法おどの更此草紙を見へり然るに中關白殿通隆かられを給ひて
 御足寄も御中も御堂殿關白の御定子皇后の宮にありて
 中宮にせせりいかにて後伊周公隆家郷かと遠流のこゝろに皇

金二ノ十四

清女が靈夢
 和歌を以て
 其意趣以
 告る



皇太后宮ハ女ミコ男ミコハト生セムハハレト程ウクカクモトモセテ後ハ清珠
の御景合もむつづけて失われれば彼方の人ハ時々うらむして成止ハレ
あくる由もこれ清少納言もさういふもさういふもさういふもさういふ
のひりよめてトク

同 古墳碑 古墳のあつてゐる自然石の表に平一和文と鐫

清少納言塚碑

一條帝皇能大后上東門院丹奉仕例理之少納言廻君者清原元輔之女
奈理祁利故宮中仁爲天清少納言等序言鷄流此君伊吳竹之世乃人人
迺八重雲隱利鳴神之音母動響爾聞知留事之如久村肝心風雅仁正久
直久清久賢久副爲豆歌讀事波其世仁類布人希丹書波唐士之母皇國
之母落隈無久洩隈無久白銅鏡真清久見爲明米天其道乎職止爲成男
子由理毛異仁物識理之手弱女仁古曾於是玉濂吉吾讀吉國成象頭山

金二ノ十五

止云山仁十引岩鎮理坐大御神乎拜祭金光院等云寺之時守之鼓打鳴
棲之側仁此君迺與榔處也鷄理止石上古代欲利樛木迺言次來而在塚
有祁理此峩名乎清少納言塚止奈母言奈流御代之号乎宮永等言鶴間
此高支屋乎將作登爲氣流仁立民等找心母無久此塚能疊留岩乎整波
夫羅志志乎其夜當利近久家居祁類人乃夢丹佳人來天 宇都都奈幾
阿登迺志瑠肆袁夕例仁寄波斗波禮自那連村安理天之母找難等云歌
乎言互其塚乎然爲鶴事之憤寸慨寸情矣告止見津止序此人之裔孫今
波他處爾開花能移比去天任例村其人家表猶告茶屋止波言那利綾異
寸鴨綾奇寸鴨故如此異寸奇寸事波更仁母不言右毛在左毛在上於所
謂空數不凡在君之真榔處止之泉郎之於濂迺假丹毛言波阿夫佐夫可
也母不治在可也母止此寺菟王僧 宥默大僧都此度燒太刀能利心梓

之弓腹振起互此塚之由縁矣本末淺芽原本曲仁書誌互如此碑乎立鶴

丹奈母 天保十年餘五年三月 高松藩士 友安三冬撰

普門院 右塚のむくふあり則ち坊中あり

二王門 一の坂の上より金剛神の両尊と安んずる額ハ 竹内二品親王御筆あり

櫻馬場 二王門と今た右様の並本列すまう此春の頃ハ花散りて其觀あり

真光院 萬福院 尊勝院 神護院 十二景の内十二の景陣と致し此向石燈籠あり且石鳥居あり 櫻の並本のたより方の後竹藪

十二景の内 たる橋陣 林夫系

吳隊二姫笑 鄭宮千騎粧 花顔誇國色 列對護春王

月 後前竹園 今

秘得渭川畝 湘孫貽厥多 百千竿翠密 本末葉森羅

別業 坂とより方は竹園本坊の別荘なり是の内より出軒梅月と題し



二王門 坊中 櫻並樹 竹園 神馬舎 茶室

門内のたむけあり

杖十間お供さき内六

奉納の石燈籠新し

まてつもあけくも

後一様の並樹いつて

花籃のいさぎ

初瀬もといや

る風色あり

茶室

神馬舎

竹園

二王門

真光院

萬福院

尊勝院

神護院

象頭山松尾寺金光院

古儀真言宗 社領三百餘石

本坊 御影堂

護摩堂 其餘院内諸堂有之 亦奉請許

御守護贖所

方丈の大門と心曲小大を因右の方には御守護
と受るる護摩堂御修法を以て人々は御守護を
修法して御護と下るるなり

神馬堂

本坊の御影の側より當國の大守源頼重御守護を
神馬堂の御影の側より當國の大守源頼重御守護を

茶堂

神馬堂の御影の側より當國の大守源頼重御守護を

黒門表書院

石階と上りて右の方より本坊表より山内池より十二景の目

十二景の内 前池躍魚

林春舟

同隊泳其樂 自無香餌投 繞岩縱往所 活濺圍洋攸

愛宕山 遙拜所

道のちより向う見ゆる愛宕橋隈の拜所あり

寶塔

石階と上りて右の方より五智如来と安置

金二ノ十七

愛宕山

象頭山八景

春樹

愛宕峰吐月

この月、誰か

いむしうも
おのれ福を張る
うけとらふも
そも

愛宕山頭集宿鴉

隣着初月掛林斜

從今願學如恒影

更使詩思夜々加

象岳



十二景尚 雲林浩鐘

近似萬車轟遠如小磬鳴 風使朝手晚 雲樹亦含声

本地堂 德樓より少くも石の鳥井あり是と下ま石橋あり是と懸て

本尊 不動明王

石階 本社正面通西側石階蓋許あり

行者堂 石階中間右の方より後優婆塞神愛大菩薩を安置

大行司相 當山の守護神也 毘沙門天摩利支天相殿の社あり

金銅鳥居 石階の中るにあり則本社の正面あり

御本社 東向藤より九丁山の末腹あり

金毘羅大権現 或云三輪大明神 又素盞烏尊 又金山彦神

舊事紀 伊弉冉尊神避之時悶熱懊惱因爲此化爲神名曰金山彦神

次金山姫神ト云

拜殿 下は通行の石あり通人これ通りおきて教回拜は右の方石の玉垣の四角

たのめらるる本間帳料銀十二金す間帳は北の谷と裏谷とついで島の内あり

十二景尚 裏谷遊廊

林麋稚子唱 山对五川賦 凹處梵音少 吻々麋々連

三十番神社 本社の左の方石階の上端の内なり右にあり此は本社の内陣

経藏 右の拜殿に並ぶ太守源頼重郷寄附して大明板の一切経あり

紫銅碑 釈迦文珠普賢十六羅漢十大弟子等博太子普成普建志を記す

紫銅碑 経藏の傍より上より寶藏戈覽之記ト鐫以下小細文の銘あり

観音堂 寛文壬寅二月日記より本堂より後庭不出

観音堂 經藏より石階とあり下りて右の方より寺内に捨馬とまきく掛る宿禰あり

観音堂 釈迦と云ふ本社に籠るこゝに懸れば此観音堂とて通夜と云ふなり

観音堂 經藏より石階とあり下りて右の方より寺内に捨馬とまきく掛る宿禰あり



象頭山御本社

二王門内より御本社の寶前へくけ
 国守とくちの諸侯方よりの御寄附の梵
 駟一紫銅あり石のつづも御家紋の金
 色あつらひ赫と良工数くもとをせり

切く上る蟹の毛也

象頭山

雲々々々

つづも家紋

信三丸

夕ぐれや

鳥の鳴き

象頭山

後河

藻水

金二ノ丸

本尊 正觀世音菩薩

弘法大師真作

前立 十二面觀世音菩薩 古作也 左右三十三軀の尊像あり

狩野古法眼え信 馬の画奉額 堂内かの照格子の内あり

土佐守藤石光信 祇園會の圖奉額 同所並ぶ

後堂 金剛坊尊師の靈像と安ん 長二尺五寸計 兜巾縁繫して山伏の安んを懸けしけり西を伴てし

則此金剛坊と号する凡二百餘年以前當山の院主宮盛信といひ信
ひう撞に奇蹟して俄後當山の守護神とあり後其女姑本尊の照一並
安置せし崇君々衆徒とまき是と何尊靈の回轉る山と守護すれば山乃
方と向べし是は是は是のどく後書一安んより先年二百八十年のを
忌むつらう法式修めつので給人一奉像とおせしむる二日の間僅か三
つらびに用麻のれが忽晴天を曇り雷雨をびく団快あれは是又白蛇のどく
観音堂南の照一は願成就の奉額と評多かる難國の危船漂流の図天
物の面などの類別てきり 傍に奉祖の紫瓶の馬あり

繪馬堂

金二ノ六一



拜殿の傍ありて極乃
辺より北の方向眺望せ
る海上の島浦那
くすくす一をよみん
松中徳政の富士と号す
る飯の山とて凡危
橋長津八栗五根は
の思ひをてんて絶奈
りよとらうか一夕物の
ころ一か

隆祐

夕日さぬ法のより
三りつ
いづらふ浦
りねやらん

阿弥陀堂

繪馬堂の傍あり千体佛と安置し 太守頼重郷の御建立なり

孔雀明王堂

阿弥陀堂に並ぶ佛母大孔雀明王と安置し

籠所

孔雀堂の傍あり系統の誦人くんに通夜し 神輿堂 観音堂の前あり

観音阪

石階あり 荒神社 坂の傍あり 蓮池 観音堂の南の方より御神更の著し池小捨るとり

金堂

観音阪の下南の方あり境内中第一の結構莊嚴とつとも羨燕なり

本尊 薬師瑠璃光如来

智澄大師の御作

此所にて智澄大師七佛薬師の法を修し給ひしと云

例祭二月六月十月と二箇度あり 権中十月當山第一の會式なり 十日御神事なり 拜八月廿日一儀式始り 毎年頭人より小者二人づき

前年より是と決り九月八日汐川の神更とて別當金光院此所に入り召連れ 石欄小池御修法はつたより頭人祈所と造りて是小池より火と改めり

金三廿二世二

様といひ病と向は四足及び川魚又海魚の内海種蟹と合せ居る

房事と林とて其重に信し十月の御神更と勤む此間熱田女郎

といふ若女つて頭人と女抱れとて在り人當所小松の庄苗田根井四

条五條小池に村小敷代相續く其家系の者ありて是と勤む十月十日神輿

と振奉るに他の神更とつて所靈とつてつたより神輿堂より出せ

し観音堂とて面めぐり支あり是と行臺よりつたより夫より観音堂小

神輿とすく神役小つて西頭人此家の僧此と人と實は末ホと略す

の式つて後此器具とて堂の掾より庭へおきて著し蓮池へとつ

是神更の終り御神事終る諸人皆く下山して参詣人いひ編中乃

僧俗とも小廿夜一人も登山せば又此著といひ幸後つてお早朝志

く参詣して標りのむれも捨ちや 眼具ありも一著其夜に



金二ノ元三



金二ノ卅四

阿州の著念寺守護神の運び給ふ言傳ふ則山中の寺院著念寺
より例年の通り御著るこびも有之の使者来る世更つる神傳
る往古より毎年斯のじに實に奇妙の御神更に有難くも當
山お詣りて更と制むる幸中お只此一夜に限る其餘益夜も亦
同断り佐作の軍解川魚海嶺蒜おと林食とていふ
當山と象頭山と号する莫遠望より山の形勢象の如くゆるゆに
名に寺と松尾寺金光院と号し佛塔寶篋輪與る實に國中乃
壯觀遐迩の企望とる所なり折権現此鎮座の年代定らるる只神
代より其初め幾千載と言ふこと知らば然るも金毘羅といふ
名に佛は出る所なり其神号と稱する莫に佛教皇朝小治まの後に今
和國に神名帳に記し金毘羅林語して此は乳といひ或は黃色と翻し金光院と勝

金二ノ五

王經此神名なり最勝王經流布の國と守護に説法者と権現と給はんの本誓
又一説小天は示象山金毘羅神の長所なり又曰釈尊出世の時佛法と守護の
為りとて天竺に出現し給ふ則ち修羅所謂者閻嶺山の金毘羅神是なり釈
尊入滅の後舍利とて此地に後給ふ又説三輪明神清融権現新羅明神同
神の異名あり或は素盞鳴尊として三國流轉して佛法と守護し給ふ震
旦は武塔天神午頭天王と号し天竺より摩訶羅神として雲石阿闍梨向我
岡大物至命天竺よりして彼土より金毘羅といひしとも傳教大師神
域に通し金毘羅三輪一跡と釈し給ふ所の經の中不濁なり釈尊以後
婆大盤石を投し時神手とて石とて給ふ此神なり即祇園精舍此
鎮守と給ふ所のあり尚権現の靈巖奇怪の言は言語の乃より好しあり
権現の御真跡本社の上の方巖窟あり其中より中より出たり宮氏の

金二ノ五

御崇敬しうり厚く 御朱印地之旨修名河の眞蹟奉幣とわすかば実
 以日本一社の靈神あり一統小寺と金光院との莫廿廿即武天皇天平十二年
 二月の詔小天下の諸州四天王の像と安ト金光明最勝王經と寫して州に納
 り毎月八日最勝王經と繪浦やうりう齊日小殺生と禁ト僧寺と金光明四天
 王護國之寺と号れり是佛法王法とも天地と永久のしんを祈りぬ
 故る疑ふらけ其時の寺号は略せんや此の峰高き谷深き美水雲氷絶
 勝して四時の風景美觀あり十二景八景おれ待歌六前小著凡

此日月の牙とれ出ひや
 無村
 寄倒
 各嶺

金二ノ六六

金毘羅より諸方道法

北東の方

普通寺 凡里半 弥 谷 凡里余
 多度津 凡二里 白 浮 凡二里
 丸 龜 凡二里 鶴足津 凡四里
 白 峰 凡六里 佛生山 凡里半
 高 松 凡八里 志 度 凡十二里
 八 嶋 凡九里 八 粟 凡十里
 西南の方

觀音寺 凡五里 仁尾浦 凡五里
 小松尾寺 凡七里 雲辺寺 凡十里
 植田乃松 凡五里
 かすむ見ゆるは移る

是れは
 一行



金毘羅香積悉く終つて善通寺に糸指せん欲ふ小鞆橋の西詰を
 北へ往り是より行程一里半あり
 興泉寺 往還より遙く東見ゆ近世八景の内小鞆

八景之内 興泉寺鳴鐘

梅村

興入林鬱暮色閑羣鴉爭宿各飛還蒲葦聲吼興泉寺錫杖僧歸松尾山

大馬神社 大馬村の北にあり是則ち善通寺への街道なり
 祭神一座 天太王命 延喜式神名帳ニ出度郡二座之内也

二代實録ニ云貞觀六年十月讚岐國授大馬神從五位上
 榊盤開戸尊 豐盤開戸尊 隨身門の左右に祭る

此二神の傳説は古くは作らるるものなり通例の形勢に異なり是れ古くは其彫刻古色絶妙之
 事高瀬橋一村同様に所り是れ古くは作らるるものなり
 つののちり一當國に此像を立像とせん及なり

金二ノ元七



大馬神社

十首

大馬神社
 ひてよ
 志
 わらわ
 君はう神も
 んせ

師差

大麻神社隨身門 古作兩神之像 長凡四尺許

今世一昔く彫刻する隨身の形像、林の中近衛の次將の

帝王を祭り 宦家の神靈あり

神社は然るべし然れ 神代の尊と鎮座一

奉る神社ふおとく 携盤間戸豊盤間を

崇め申へ當社の神像の 尊く思へり



引糸のたひに六拵トするもの、今に於ては彩色を施すに似たり、今に於ては彩色を施すに似たり

金二ノ八

五岳山誕生院善通寺 善通寺村にあり國遍礼七十五番の札所なり

本尊 薬師瑠璃光如来 弘法大師作 座像長一丈六尺 金堂に安置

五重大塔 金堂の南にあり先年焼亡 鐘樓 大塔の右あり 鼓樓 大塔の左あり

常行堂 鼓樓の東 觀喜天祠 鼓樓の南あり 五社明神社 大塔の右の東あり

天神社 金堂の左の 經藏 金堂の右の 善女龍王社 金堂の後池の中あり

南大門 金堂の正面あり 法然聖人塔 南大門の内東あり 足利尊氏郷塔 法然聖人の塔あり

楠大樹 南大門の内西の傍に二本あり、實に希代の大樹なり

觀智院 金堂の南にあり 道條の左あり 花成坊 同左の傍にあり

院主坊 花成坊の南にあり 寺中藥師堂あり

眞院御影堂 弘法大師 親鸞堂 御影堂の左の傍にあり 十王堂 同左の傍にあり

茶堂 十王堂の並ぶ 鐘樓 十王堂の 二王門 大師堂の正面東にあり門外に石橋ありて世に

是より
奥院
三門
へく



楠大樹

薬師堂

院主坊

花成坊

五社明神

五更塔

鐘樓

手水

南門

會氏塔



善通寺

不動堂

龍女社

金堂

経藏

拜殿

天神社

大石木

藏樓

觀喜天

常堂

東門

金二ノ亦九

法華堂

護摩堂

御影堂の

御影池

本坊の向きわりの池の傍にあり大師の唐の時母公

御成門

池の傍にあり

本坊

護摩堂の傍にあり大師の唐の時母公

邀月亭

本坊の南裏門の傍にあり

月見亭あり

當寺の往昔弘法大師誕生の地にて又佑伯善通聖世の家園なり母阿刀

氏の人なり大師此兩親に託して此地に降誕し給ふ故に幼推して在りし時

遊びのいへり行も今も残る諸唐末法の後此地に於て寺より又母祖先

の追善具を永世人民の福田に擬しり行りり則又善通の心と取て善通

寺と号し誕生の地なる故に誕生院と稱しり將五岳山と号するは後五

山ありて則五佛の峯なりと香色山二と筆山二と我拜師山四と中山

五と火上山といふ五峯峙つ簾なる故に号し就中我拜師山六釈迦如来

出現の峰なる故に六釈迦山と稱し南に普賢菩薩の山ありて象頭山

金二ノ四十

と号し北に文珠大士の山ありて獅子山と号し中なる五佛の山と普賢菩薩

の因遠に給ふ給ひら然し形も現在なり大師の教指歸は白王深所歸之

嶋椽樟蔽日之浦とあり即ち此地の夏ありてを往古の伽藍に唐土の昔

龍寺と撰し給ふ言傳を道範阿闍梨の記に大伽藍とて夏と詳著せり

山家集に 大師のうもれさせひたるくちがうもりて其あるなり

西の

西の

西の

道範阿闍梨の記に其所なるく廣くをり今も如法徑と納り七裏の

石塔ありと道範師の奇なり

高野山岩のやまにすむ月はけふりともり昔々うらやんで

右西の道範の頃まで昔の伽藍あり由らば後集移りたりと今の



金二ノ四十一

大師堂の前の誕生まじまじ古蹟の所は作まらざり
 又西の紀に大師の御年ふもも海に四の所の額ありこれ大
 うの遠く侍りた末の世に如何なる人となんぞ東より
 侍りし有道公範の時まで二牧りて善通之寺と書せられり
 此道範阿闍梨といふ高野山に住せられ大徳ありに治四年の春不慮
 る不慮の罪と書るまじりて此國に配流せられ幸ひ大師の遺跡と慕敬と
 寛元二年九月より當寺に移住ありて此寺を製作の書籍木を言
 へ兼元の始に法然上人も此國に流さるる時大師の遺蹟を拜せん言
 悦むるを西の上人行脚のしに安の年法然上人配流し兼元元年其後道
 範大配流に治四年九此同年曆七十有余年一及び
 真雅僧兵大師の御胞弟と云來此所より出りて故に此寺に住せり
 勿論に其後遍照院の僧正實朝延命院元泉小師のに海有範者源有
 靈場記曰

快木の高德達任居せりト云

往昔より宮武の御崇敬代儀に於て論旨院宣二十余通項戴し且
 將軍家御寄附之状も數多ありて在田多ありて禪講の精衆林と曰
 勅會の法事も有り一聞尚靈宝什物品目ハ夏盤りきハ畏之

東鑑安貞二年戊子三月十二日之條

今日被禱止讚岐國善通寺領之地頭職畢是弘法大師御誕生
 之地長日不退御祈禱之砌也本佛則大師御自作釈迦藥師像
 云云而近年被補地頭於彼領之間寺用闕如之旨依捧歎状殊
 有^二其沙汰被止之^一云云

傳云往昔陰陽の博士安部清明其の縁りて當國に下向の時夜道にゆ
 程に相俱し使鬼神火を燈しりるが善通寺の前をすぐる時火を打消て

使鬼神善通寺の
額と忠まて道と
変る



金二ノ四十三

往方と云へば然る寺と過ぐ後出来まう清明のぶと其故の問を使鬼
神のてて此寺の額西天守護一給お致し忠まて道と変る言
一もろとど是る人所謂大師の筆うと書せ給ひ額あり

押弘法大師當身度郡屏風浦依伯の直由公子なり母河刀の仕官女
夢に梵僧懐小入と見てとるら姪に十二月と経て光仁帝寶龜五年六月
望月生その小名貴物と号し穎敏甚と世に異して神童と稱れ初
して經史傳に通ト石園寺の沙門勤操に從て虚空藏求同持の法と授
くも是利髪法衣の姿も成ぐる前より二十果して勤操就て落髮
沙門の十戒を受け二論と委しく研究は法衣と教海と稱れ後自ら改め
て如堂と号し其後延暦十四年東大寺の戒壇に登り具足戒と受けて
宣海と更む同廿二年夏末法の為遣唐使に随つて入唐し給ふ彼より

て、徳宗皇帝貞元廿年、青龍寺の慧果阿闍梨、觀も慧果の曰く、汝
此來、何ぞ晚きや、我相待りてこゝへ、今してより、西都の秘傳、
一法器を授け、雷摩まるとこゝへ、年して、解朝の時、年二十、宋唐土元和元
年、和朝とて、大同元丙戌年、帝と始めて、御殿上人とて、空海と尊し、
時、二論の名、道昌唯識の碩學、源仁華嚴の譽ある、道雄天台
小隱も、圓澄も、争ひの旗と捲く、降赤、弘仁七年、紀州高
野山、金剛峯寺と、草創、同十一年、帝宸翰とて、傳燈大法師位の記と
賜ふ、同十四年、東本寺と賜て、灌頂院と建らる、天長元年、天下大旱、
海勅し奉りて、神泉苑、清雨の法と修し、勿地、應驗あり、同二年
高雄山と賜る、兼和二年二月廿一日、年六十二歳とて、高野山へ入定
給ふ、其後、延喜二十一年冬十月、弘法大師と謚と賜る

往吉地、海へて、前、五峯、尾の、海、
風、浦、ら、ら、ら、を、今、一、圓、陸、地、と、り、て、其、形、と、そ、ふ、ら、も、
く、あ、り、言、傳、え、り

鎮守八幡宮 後の山あり、依、依、伯、の、八、幡、宮、と、り、て、大師の、兩、親、と、祭、り、の、入、門、と、を

獨鈷水 後の山の、林、下、小、り、の、井、あり、と、い、ふ、も、水、つ、ら、つ、清、潔、さ、り

御手洗水 大師、独鈷、と、り、つ、て、穿、ら、り、た、す、一、所、と、を、
十、丁、を、り、の、方、に、り、出、り、の、と、り、つ、て、清、潔、さ、り

土俗、曰、往、古、大師、當、寺、の、本、尊、と、作、り、の、ま、當、山、の、土、と、以、て、此、水、と、和、作、り、給、
ふ、と、故、に、始、土、佛、と、り、と、後、に、作、り、わ、さ、せ、の、ま、は、今、も、山、水、靈、驗、あり、
て、諸、病、を、治、ま、す、と、速、く、か、ぶ、ゆ、く、人、あ、ま、り、て、治、り、た、り、出、り、甚、し、く、と、を、
八十八箇所之石佛 香色山の、山、中、に、り、一、圓、靈、樹、の、本、尊、と、石、像、と、造、り、と、兩、
西護荒神祠 右、同、山、中、に、り、一、西方、守、護、の、荒、神、と、觀、瀆、り、
建、り

南護荒神祠

南大門の南西の傍より南方の守護あり

東護荒神祠

東門の外右橋の傍より東方の守護あり

北護荒神祠

在中の北より北方守護の荒神あり

六地藏堂

東門の東丸龜街道の傍に南側より



金毘羅齋請名所圖會卷之二畢

金二ノ四十五

